

Title	日本と印度
Author(s)	ティラク, バール ガンガーダル; 高橋, 明
Citation	印度民俗研究 別巻. 6 p.19-p.23
Issue Date	2020-12-31
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78712
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

日本と印度

バール・ガンガーダル・ティラク

高橋 明 訳・注



露日戦争における日本の最近の勝利と——もともと緒戦から日本は勝ち続けているわけだが——至る所の戦場で日本人が示している巧みな戦いぶりを見たり聞いたりして、多くの西洋人たちが亜細亜の人間の能力について考え直さざるを得なくなっている。それについては私も何度か本紙に書いてきたところである。亜細亜の人間たちがいかに体力に優れ、また暑さ寒さ、喉の渇きに耐える力を持ち、また個人としていかに勇敢であったとしても、彼らには国家という觀念が欠けていることから、西洋人の助けを借りずには西洋諸国に太刀打ちすることはできないというのが、これまでの西洋人の考えであつた。それどころか、亜細亜、阿弗利加、亜米利加、この三大大陸は西洋人のための牧草地として神がお創りになつたのである。そして自分たちが住むことができないような土地では、黒い肌の原住民を征服して、その労働によつて取れた收穫物のうちから原住民たちが生きていけるだけのものを残して、そのほかのすべてを西洋人たちは自分の国の發展のために奪い取る、それが自分たちの義務である。いや、そればかりか、そうしなければ神の大御心に背くことになる」と名のある西洋人たちの書いた本の中にそう書かれている。露日戦争のおかげで——その戦いの帰趨がどうなるかは別にして——こうした考え方がかなり覆されたこと、そして覆り続けていることは、最近のこの戦争から得られた大きな歴史的成果と言ふべきである。亜細亜の人間を単なる兵卒として使用するのではなく、もし彼らに近代戦についての適切な教育を与え、武器の使用方法やその他についての戦闘技術を教え、さらに必要となる十分な武器弾薬を与えるならば、亜細亜人の兵士たちは同じ亜細亜人の將軍たちの指揮下にあつても、強力な上にも強力な西洋の軍隊を相手に立派に戦うことができる、このことが今回疑問の余地なく証明された

のである。要するに、西洋人と亜細亜人の間の違いとしてこれまで言われてきたことは生まれつきのものではなく、後天的なものであつて、もしも亜細亜人たちに最新の兵器や武器、そして教育が西洋人と同じように与えられるならば、亜細亜の国々も西洋諸国と肩を並べることに何の支障もなくなることを、今や多くの人たちが認めるようになってきている。国によつてそれぞれ得手不得手ということはもちろんあるだろう。しかし、亜細亜諸国がいつまでも西洋諸国の言いなりにならないような生まれつきの欠陥が亜細亜人たちにあるわけではないということを、日本人が世界に向かつて、言葉ではなく行動で示したのである。

さて、これについてさらに書くべき多くのことがあり、また実際に私は書くかと思つてゐるが、今回私が取り上げるのはいささかそれとは別のことである。それは何かと言へば、マドラスの主教殿¹が最近マドラスで行つたある講演についてである。日本が西洋風の教育と兵器、戦術を学ぶことわずか四十年の間にこれほどまで成長した一方で、印度人たちは過去百年にわたつて優れた教育を享受し、それも西洋の中でも特に優れた国である英国とこれまでもともに歩んできたにもかかわらず、なぜ印度はかくも遅れているのか、なぜ日本だけが發展したのか、そのことがこのマドラスの主教殿にとつてまったくの謎と映つたのである。こうした疑問を持つのは主教殿だけであつて、他の人間たちは何とも思つていない、というわけではない。日本人の勇氣、団結、そして勝利を眼前に見て、印度人すべてにこの疑問がつきつけられてゐるし、これから先もそうあり続けるだろう。印度人は、身体的にも知的な面でも日本人に少しも劣るところはない。それなのに西洋の学術が日本人にとつては甘露のようなものとなり、わが印度人たちにとっては飲んだところ

でただ酔っぱらうだけの酒になったその原因がどこにあるのか、苟も物を考えようとする人は考えざるを得ないのである。「神の思召し次第で、毒は時に甘露となり、甘露は時に毒となる」と言われることはあるが、それで済ませるわけにはいかない。では、上に述べた疑問に対する解答はどうかといえ、それは二つある。一つは、日本人に与えられた西洋の教育、あるいは日本人が自ら進んで手にした教育、それと同じ教育を印度人たちは受けることができなかった。つまり、両国が受けた教育はいずれも西洋風のものであったが、実の所一つは甘露であり、もう一つは酒であつたというわけである。言い換えれば、教育の方針、施策、そしてその中身に違いがあつたために印度と日本では同じ西洋風の教育の結果に差が出たということになる。もう一つの答えは「師が授ける知識は、賢者と愚者次第でそれなりに」というわけで、同じ西洋風教育の結果が日本人と印度人とは異なるものになつたのである。最初の答えでは、日本と印度では与えられた教育の内容が違つていた、二つ目の答えでは、教育は同じであつたが受け取る側の人と社会に違いがあつたということになる。はつきりしているのは、最初の答えによれば、責任は印度の為政者たちにあり、二つ目の答えによるならば責任は印度の人々にある。であるならば、為政者たちが自分の責任を認めずに、人々に責任ありとしようとしたとしても驚くようなことではない。マドラスの主教殿もつまりこれに与する人なのである。同氏の講演の眼目は、英吉利人治世者たちが印度人に与えた西洋風教育は、他ならない印度人たちの短所のせいで身に付くことがなかつたということにある。中でもその最大の短所が身分差別とされた。日本人は西欧教育に接するや否や、身分差別を撤廃して一つの民族となつたが、印度人たちはそうならなかつた。おまけに日本人の間には西洋の

学問と技術を何としても身に付けたいという熱意があつたが、印度にはそれがなかつた。古いものを捨てるべきか、新しいものを受け入れるべきか、その二つの間で竿秤の竿のように揺れているばかりで、覚悟を決めるということがまつたくなかつた。覚悟がなければ成果もない。日本人はそうではなかつた。西洋諸国の発展、勢力、学問、技術を目にするや否や、日本人はそれらを受容するだけでなく、この上ない熱意と信頼をもつて古きものへの執着を捨て去つた。そして頭から爪先まで欧風化した。印度人もまた竿秤の竿の上にまたがることなく、断固として西洋教育を我が物とすれば、彼らも日本人と同じように発展すること疑いなしと、そう主教殿は最後に祝福を与えて下さつてゐる。

上に述べたように、主教殿の意見は統治する者の立場からのものである。為政者たちにとつてみれば、こうした考えこそ印度人の間に広まつてもらいたいのである。つまり印度人の中にいくつか欠点があるのだとそう思つてもいいのである。しかし、残念ながら、その考えは事実に基づいたものではない。日本人が享受した教育と同じものを印度人が受けていると考えること自体がまず誤つてゐる。たとえば、軍事教育を例にとつてみよう。肌の色の黒い兵士と下士官たちは、英吉利人の上官たちの命令を理解してそれを実行するのに必要な教育しか受けていないのである。兵器を製造する工場も、あるいはいろいろな種類の新しい武器の使用法について教えるための学校も、政治家たちはこの印度に作つてはいない。こんな有様では、印度人が身体的、知的な面でどれほど優れていたとしても、黒木、や大山、のような能力を身に付けることができるはずがないのである。外国人の為政者たちが、独立国家の政治家のように、国民に軍事教育を授けるわけがないと言ふ人も

いるかもしれない。しかし、また別の方面に考えを巡らせてみても、そこでもやはり同様の嘆かわしい状況が見えてくる。化学、地学、産業、そして様々な種類の技術、これらを学ばせるために、日本は毎年何百人と言う留学生を過去三十年、四十年にわたって外国に送り出しているが、同じことをわが印度政府はやってきたであろうか。現在のところ、留学奨学金を支給されているのは管区ごとに年にたったの二人である。しかし、本当に国のことを考えるのであれば、これまでに印度人留学生を何百人か外国に派遣しているのが当然ではないか。印度を一握りの英吉利人官僚で統治することが不可能なことから、彼らを助けるために下級勤務者としての役人を養成する以上に、印度人に教育を受けさせる強い意志が政府にはないのである。このことは主教殿もお認めになるだろう。こういう状況下であれば、過去五十年の間印度の大学から研究者が育つことがなかったし、ましてや北里⁴のようにペスト菌を発見するようなこともなかった、あるいは黒木のような英雄が印度に生まれなかったとしても、当たり前ではないか。家庭内の飾りのために、または趣味のために植木鉢に植えられた木と、広々とした園の中で育つ木との間にある違いが、まさに印度と日本の学生たちの間にもあるのである。自由な風を受けて空高く伸びたデイゴの木と、メーガドウータの中で歌われている、踏み段に寶石をちりばめた泉の側に、ヤクシャの妻が大切に育てた「花の重みで手の届くまで枝の垂れた」デイゴの若木ほどの違いがここにある。印度の大学や官吏養成所から出てくる卒業生たちは、このデイゴの若木のようなものである。その木が英吉利人たちにとって美しく育つように、その果実や花があまり努力しなくてもきれいに咲いたり実ったりするように、最初からそう仕組まれているのである。しかし、面白いことには、その木がその通り

に育ったと思えば、「おまえは勇敢で、学問もあり、美しくもある。だがおまえの生まれたその家柄では、象は殺せない」と今度は反対に木に責任を押し付けるのである。主教殿の講演の中に大きな過ちがあるというのはここである。印度の為政者たちが外国人であるのが理由だと言えはいい、またほかにも理由があるとも言えはいいだろうが、そもそも我々には独立国家で国民が受ける教育が与えられていない。与えようとしていない。これこそが本当の理由である。しかるに、身分差別だのなんだのと理由をつけて我々に責任を押し付けようとするとは、まさに盗人猛々しいとはこのことである。西洋の教育によっても印度が日本のような立派な国にならなかったというのは事実である。であるならば、誰がその責任を負うべきであるか。為政者たちに責任があると言いたいが、あいにく彼らは自分の同国人である。ならばとばかりに、印度人に責任を押し付けて澄ましているのが主教殿である。我々は誰かの手練手管にだまされたり、不埒な新聞どもにたぶらかされたりする愚か者ではないと、私は主教殿に申し上げたい。日本は四十年を経て西洋諸国と肩を並べるようになった。一方、我々は年毎にいよいよもって意気消沈し、覇気を失い、外国人の重荷を背負つてとぼとぼと歩んでいる。もしもこの相違の拠ってきた根本原因を知りたいのであれば、それは一言で言える、国に自治があるかなしか、だど。自治とは、今の支配者たちが出て行って、別の支配者がやってくるということではない。印度という国が他の英吉利統治下にある自治諸国と同様に、自分のことは自分でできるだけの力と自由を持たなければならぬ。そうならない限り、甘露と称する歐風教育の酒を飲まされるだけである。さて、それができれば、酔っぱらうその原因の追究が身分差別ではなく、現在の統治体制に向かうことは明白である。

そのときになって、為政者たちの同国人であるマドラスの主教殿のような方々が何と言おうとも。

¹ 当時、マドラス管区の第5代主教 (Lord Bishop) の職にあった Henry Whitehead (一八五三―一九四三) を指していると思われる。

² 黒木為楨 一八八一―一九三〇、鹿児島生まれ。日露戦争では第一軍司令官となり、クロバトキン指揮下のロシア軍を破り勇名を轟かせた。

³ 大山巖 一八四二―一九一六、鹿児島生まれ。日露戦争では満州軍総司令官として出征。

⁴ 北里柴三郎 一八五三―一九三一、肥後生まれ。一九〇四年、ペスト菌を発見。

解題

日露戦争における日本の勝利が当時のアジア諸国の人々に与えた衝撃を示す事例の一つとして、バール・ガンガーダル・ティラク (Bal Gangadhar Tilak 1856-1920)、マハーラーシュトラ出身の独立運動の指導者) によりマラーティー語で書かれたこの短い論考を訳出した。今の日本の若い人たちが日本の近代史についての知識を豊かにする一助となれば幸いである。

訳文中で「」内に示した部分は、いずれも原文はサンスクリット語である。また、サンスクリット語詩人、カーリダーサ作『雲の使い』への言及があることでも、当時の読者層がどのような文化的背景と教養を持つ人達であったかをうかがい知ることができる。

原題：जपान आणि हिंदुस्थान

(著者が編集・発行していた週刊紙「ケーサリー (Kesari)」 一九〇四年十二月六日号に掲載)

出典：लोकमान्य टिळक लेखसंग्रह (लोकमान्य बाळ गंगाधर टिळक यांचा केंद्रस्थित निवडक लेखसंग्रह),

ed. Tarkatirtha Laksmanashastri Joshi, Sahitya Akademi, Delhi, 2009 (Reprint). pp. 335-339.

参考文献：『新潮日本人名辞典』、新潮社、一九九一年